

SRID NEWSLETTER

No. 390 June 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.sridonline.net>

アイデンティティを選択する自由

早稲田大学 大門 毅

ナラヤンプール村の支援プロジェクト

婦人クラブ 平間 保枝

お知らせ

1. 懇談会

日時：6月26日（木）午後6時30分から9時ごろまで

講師：萩原孝一 SRID 会員

テーマ：バナナファイバープロジェクト

会場：国際連合工業開発機関 東京投資・技術移転促進事務所

〒102-0092 東京都千代田区隼町 2-19 ジョワレ半蔵門 7 階

2. 7月号のニューズレター

大嶋氏

福永氏

アイデンティティを選択する自由

早稲田大学 大門 毅

現在、アマルティア・センを題材として、経済開発と紛争の問題について考えている。アマルティア・センは *Identity and Violence* (2005)

(邦題『アイデンティティと暴力』(2008 予定))において、個人が帰属する集団または属性と自己同一化すること、つまり、アイデンティティは文化的なものであれ、宗教的なものであれ、政治的なものであれ、はじめから「与えられたもの」「変えることはできない」ものとするのは誤りであるどころか、そのような認識がグループ間の偏見や対立を助長しかねないとしている。これは、*Development As Freedom* (1999) (邦題『自由と経済開発』(2000))などにおいて展開する、センの開発論と共通する立場である。

センにとって、そもそも、アイデンティティとは一個の自由な個人が有する、複層的な概念であり、個人が単一的 (例えば文化・宗教のような) 「アイデンテ

ィティ」に拘束されるのではなく、複数のアイデンティティの中から、個人が理性により「選び抜く」ものである。もちろん、性別や国籍などの生来の属性はあるが、どの属性を自らと同一化(identify)させ、優先順位を付けるのか、それも選択する自由がある、としている。

センが暗に警告を発しているのは、ポスト 9.11 の混沌とした国際情勢において、頻発するテロリズムや紛争を「イスラム原理主義」の「米国中心主義」に対する報復のような、「文明間の衝突」(サミュエル・ハンチントン)として単純化しがちである、国際世論に対してである。「たまたまムスリムに生まれついた人」が必ずしも「イスラム教義」(どのように解釈されたものであれ)に拘束されることはなく、自由に価値を選択してよいし、歴史的事実に照らし合わせてもそうした事例は少なくないとしている。例えば、ムガル帝国時代のアクバル皇帝(1542~1605)は、ムスリムであったが多宗教間の対話を重んじた。

センは多文化・多宗教を背景にもつ、インド・ベンガル地方の出身である。イギリスからの独立間もない、1940年代、センがベンガルの実家で幼少時代を過ごしていた頃、イスラムとヒンズーの無益な争いを目の当たりにする。ある時、一人のムスリム青年カディール・ミアが自宅の庭で背中を刺されて血まみれになっているのを目撃する。結局、カディールは、ムスリムであるが故に、たいした手当も受けることなく、死んでいく。セン少年は、この事件に深く心を痛め、疑問を抱き、こうした対立を克服するためにはどうしたらよいか、そこから自問自答がはじまる。その後の長年にわたる、研究や思考の結果、行き着いた一つの答えが「アイデンティティを選択する」自由である。これはセン自身の社会の現実の矛盾、また矛盾が故に生ずる人と人、国と国との争いを目の当たりにした、悲痛な訴えとも思える。

私はこれまで、パレスチナ、シエラ・レオネ、東チモール、アフガニスタン、ミャンマーなどを歩いてきた。こうした国において、アマルティア・センが指摘するように、歪んだ自己同一化、意図的な他己同一化が紛争の火種となってきたことは否定できない。しかし、こうしたことは、人ごとではない。日本においても現実には起きていることに注意すべきであろう。1995年に起きた、地下鉄サリン事件。歪んだ集団的アイデンティティが暴走した。2001年に起きた、池田小事件。そして、今月に発生した、秋葉原無差別殺人事件。犯人は自己を「負け組」と自己同一化し、世間の「勝ち組」(「誰でもよかった」)に対して、牙をむいた。アイデンティティは生き方そのものである。その生き方に優劣を付け、競争させることは、ある意味、暴力や争い(の原因)を容認するのと同

義であろう。

こういうと必ず反論される。犯罪を正当化するつもりか、と。いや、決して、正当化ではない。凶悪な犯罪やテロリズムにも、偶発的な要素と非偶発的な要素があるはずだ。前者については、どうしようもないが、非偶発的な要素の内容、犯罪・暴力の発生メカニズムについて、考え、人がそうしたことに敏感であれば、暴力的行為を少しでも減らすことができるのではないだろうかと考えるのである。

日本社会はとかく、他人の評価を自己規定のよりどころとするところがある、とされてきた。最近はやりの、KY（「空気が読めない」）もその延長線上にある。他人の評価をおそれ、その中で自己規制し、自分は KY ではないか、あの人は KY だ、などと有形無形のアイデンティティの「壁」をつくって、その中に個人を閉じこめようとし、入らない者を KY として排除する。KY 大いに結構ではないか。

アイデンティティは複層的であり、個人が自由に選択することができる。個人が集団と同一化しないことをもって、「異端」と排除する時点でそうした自由を放棄したことになる。そうした認識を社会の一人一人が共有するためには、教育の役割が大きい。しかし、日本の教育にも課題が山積している。私はいま高等教育という業界に身を置いている。

これまでの日本の教育は、長い間「空気が読めるよう」な均質で良質な勤労者を大量生産してきた。しかし、バブル経済が崩壊してから、かけ声だけの「ゆとり」（これは結局、教わる側というより教える側のゆとりにすぎなかたのではないか？）が重視されるようになり、結果、学力面での「格差」が広がった。また、貧富の格差も広がった。格差が世代を超えて受け継がれ、不平等が固定化した。多様な価値観を認めようというかけ声とは裏腹に、「勝ち組」「負け組」の対立的アイデンティティがつくられ、固定化していったのである。KY と並んで、この「勝ち・負け組」という言い方そのものが、アイデンティティの選択論と逆行するものである。

今も、世界各地で「アイデンティティ」を巡る紛争が繰り返されている。アイデンティティを選択する自由があれば、また実際になくともそうした発想を共有することにより、争い、人の生命を奪うことの愚かさに気づく人も増えていくのにとと思う。そしてその問題は、遠い国のことではなく、実は、日本人を含めた考え方、生き方そのものが問われていることに気づくべきであろう。

ナラヤンプル村の支援プロジェクト

婦人クラブ 平間 保枝

SRID 婦人会とバングラデシュのナラヤンプル村の結びつきは、9年前にさかのぼる。婦人会がアジアに対する支援先を探していた矢先、元バングラデシュ駐日大使だったヘダイエトゥル・ハク氏が日本での生活に終止符を打ち、これから祖国のために働こうとしていた時期が一致したことだった。当初、まだダッカのアパートが完成しておらず、アメリカの子どもさんのところにおられたハク氏は、支援金を逃すまいとして必死だった。SRID はお金を騙し取られまいとして、送り渋り、ハク氏は逃すまいとして催促の連続で、少しのすったもんだがあったが、それも過去の記憶となり、小学校の一部として献金した 60 万円は、立派な校舎として役に立っているばかりか、それに端を発したプロジェクトは今や、村が「日本村」と呼ばれて、人々の日本に対する信頼を集めている事実は喜ばしいことである。

ハク氏の友人が提供していた村の学校の教師 2 人分の給料約 12 万円も 3 年前から婦人会が引継いでいる。9 年の経過の中で、学校には音楽、絵画のクラスが増えた。教育内容が充実していることから、2006 年に公立学校として指定され、2007 年にはハク氏の親戚筋にあたる村の教育係アンワー・ホッサンとハク氏が政府から表彰されている。アンワーは、自分たちの子どものために、と村に掘っ立て小屋の校舎を造ることから始め、村人の信頼の対象である存在でありたいと願う人物で、ボランティアで仕事をしてくれる。

音楽、絵画の教師の給料、文具の他に、栄養の足りない村の子どもたちに食料の土産を提供しているのは、サクラ・モヒラ・トレイディングである。ハク氏の強い要請で、村の開発資金をつくるために 2004 年にスタートさせたサクラ・モヒラ・トレイディング（以後、S.M）は、バングラデシュの絹を売るというものだったが、試行錯誤の末にバングラデシュの絹、綿を使い、製品に仕立てて日本で販売するようになった。

現地の福祉トラストであるクムディニという企業に S.M が技術指導をし、日本人用のデザインとパターンを提供して、バングラデシュの伝統的手作業を取り入れながら、制作を依頼している。S.M が資金を手当てできるようになってからの村のプロジェクトは次第に充実してきている。学校の援助の他に、最貧層に属する「土地、家、夫のない」女性たちの互助会を組織し、リーダーを雇って彼女たちにマイクロクレジットのシステムを適用して生活の援助を始めた。

これは成功し、S.M が提供した元手と女性たちが勉強会のたびに積み立てた資金は、今や3%の運用資金とともに初めの2倍以上に増え、女性たちの積立金を返してもいいのではないかと、という段階にきている。彼女たちは、その資金からリーダーを通して必要に応じて借り、返している。子どもたちが就職するための準備金になったり、畑の作業の費用になったり、冠婚葬祭の費用を賄ったりと生活を維持するための費用の他に、起業（極小だが）の費用を賄う女性さえも出てきている。

また、トタンでできた小さな家だが、仕事場として借り、ミシンを4台買を入れて、裁縫の教師も雇い、比較的若い村の女性たちがミシンを覚えられるように計るとともに、小さな仕事を発注して制作費を払い、それもS.Mの販売会で売られるようになってきている。現在、裁縫のプロジェクトの女性たちは少し自信がついたのと物価高で、もっと仕事をほしがるようになった。

それを阻むのは、ナラヤンプル村の地理的不利益である。9年の歳月はプロジェクトに充実をもたらしたが、関係者の高齢化も同時に進行させ、ハク夫妻のパワーはあまりあてにできなくなった。製品を村からダッカへ運び、そこから国際便で発送するという手段に今は頼っているが、その作業は、交通の便、それに絡む村人やダッカのハク夫人の時間と労を考えると3日以上は必要だ。おまけに、その3日を捻出するための準備期間もかかるのだ。

ただ発送するだけのことだが、バングラデシュでは、「ただ」が取れ、大仕事なのだ。村とダッカの距離は年月が経ても決して埋まることはない。雨季になるとやっと舗装された村に続く道路はでこぼこ道になり、通うのも、容易なことではない。郵便もあてにならない。道が再びスムーズになるためには、バスが横転し、人が5~6人くらい命を落とす必要があるのかもしれない。ただ、携帯電話が普及し、話ができる環境はよくなった。半年分の仕事をおいてきたらいいのかもしれないが、それは製品の質が心配される。こちらがもっと頻繁に通えばよいかもしれないが、このプロジェクトの費用を捻出するためには、パートタイムの仕事は止められず、時間も資金も都合がつかないという日本側の事情を抱えている。

しかし、その中で手探りし続ければなんとか進行できる部分も出てくるのかもしれない。現在、ダッカ大学の日本語学科の学生が一人、彼の日本語習得も兼ねながら、有料で村行きに同行してくれるようになった。さらに奨学金を出し

始めたダッカ大学の学生たちもいて、徐々に若い人材がプロジェクトに関わり始めている。支援の充実にともない、かかる費用も増えるが、今やダッカ大学の若者たちも職の問題として「日本」に希望をつなぎ始め、村の子どもたちは「命の沙汰も金次第」とばかりに栄養状態も食料状況も悪いので、簡単にこの世に別れを告げる現実を聞かされると、道は進むしかないか、というのが現状である。